

7 ヘレン姉さん

「なぜ 蠟人形を溶かしたの

ヘレン姉さん

今日で 手掛けてまだ三日目なのに」

「長かった でももうお仕舞よ

弟よ」

5

(ああ 聖母 母なるマリア

今日で三日！ 天国と地獄の^{あわい}間で)

「でも 仕事がちゃんと終わったのなら

ヘレン姉さん

もう遊ばせてよ 遊んでいいと言ったでしょう」

10

「^{こよい}今宵は 静かに遊んでちょうだい

弟よ」

(ああ 聖母 母なるマリア

今宵は三日目の夜！ 天国と地獄の^{あわい}間で)

「入り相の鐘が鳴る前に溶けきるように と言いましたね

15

ヘレン姉さん

いま溶けてしまえば 間に合うね」

「ええそうよ いいえお黙り！ お前にはわからないこと

弟よ」

(ああ 聖母 母なるマリア

20

これは一体どういうこと？ 天国と地獄の^{あわい}間で)

「蠟人形は 昼間は丸々してたのに

ヘレン姉さん

死んだ^{もの}人間そっくりに 瘦^こけてしまった」

「いいえまだよ 死んだ^{もの}人間とは一体なんのこと

25

弟よ」

(ああ 聖母 母なるマリア

死んだ^{もの}人間とは一体？ 天国と地獄の^{あわい}間で)

「ごらんよ ごらん 肉の落ちた骨組みが
ヘレン姉さん 30

溶けた蠟に透けて 血のように赤く光っている」
「いいえまだよ いつ一体血を見たと言うの
弟よ」
(ああ 聖母 母なるマリア
なんと蒼白^{あお}い顔！ 天国と地獄^{あわい}の間で) 35

「さあ目を閉じるんだよ 疲れて真っ赤だよ
ヘレン姉さん
ぼくは 外のバルコニーで遊んでいるから」
「そうね 休みましょう 床^{ゆか}に横になるわ
弟よ」 40
(ああ 聖母 母なるマリア
今宵^{あわい}どんな休息が？ 天国と地獄^{あわい}の間で)

「バルコニーの上の方で
ヘレン姉さん
お月様が ぼくにむかつて飛んでくる」 45
「そう なんでも見えたら教えてちょうだい
弟よ」
(ああ 聖母 母なるマリア
今宵^{あわい}どんな光景が？ 天国と地獄^{あわい}の間で)

「外は 風が吹いてさわやかだよ 50
ヘレン姉さん
揺れる樹^この間に 星^まが寒そうに震えている」
「しっ たった今 馬の足音が聞こえなかった？
弟よ」
(ああ 聖母 母なるマリア 55
今宵^{あわい}どんな物音が？ 天国と地獄^{あわい}の間で)

「蹄^{ひづめ}の音が聞こえてくる そして見えるよ
ヘレン姉さん
三人の男が 疾風^{はやて}のように駆けてくる」
「弟よ その三人はどの方角から？ 60

弟よ」
(ああ 聖母 母なるマリア
彼らは一体どの方角から？ 天国と地獄の間^{あわい}で)

「ポイン川の河口の方から 丘の麓^{ふもと}をめぐって来るよ
ヘレン姉さん 65
一人が近づいてくる あとの二人はうしろの方だ」
「よく見てごらん それが誰だかわかるかい
弟よ」
(ああ 聖母 母なるマリア
それは一体誰なのか？ 天国と地獄の間^{あわい}で) 70

「急いで来るのは ^{イーストホルム}東中洲のキースさんだよ
ヘレン姉さん
だってあの 風になびく白いたてがみを知っているもの」
「時が来た ついに来たのよ
弟よ」 75
(ああ 聖母 母なるマリア
ついに待っていた時が！ 天国と地獄の間^{あわい}で)

「手を振って おへいと呼んでるよ
ヘレン姉さん
姉さんと話したいと言っている」 80
「言っておやり わたしは冷たい夜露に濡れたくないって
弟よ」
(ああ 聖母 母なるマリア
なぜ彼女はそうに高笑^{わら}うのか？ 天国と地獄の間^{あわい}で)

「風の音がひどいけど でも聞こえるよ 85
ヘレン姉さん
ユアーンのキースが死にそうだとさ」
「彼とあなた あなたとわたし
弟よ」
(ああ 聖母 母なるマリア 90
彼らとわたしたち！ 天国と地獄の間^{あわい}で)

「三日前 結婚式の朝に

ヘレン姉さん
具合が悪くなって そのまま寝込んでるそうだよ」
花婿さんの脇に花嫁さんという棘でも刺さったのかしら 95
弟よ」
(ああ 聖母 母なるマリア
冷たい祝宴のご馳走かな！ 天国と地獄の間^{あわい}で)

「三日の間 彼は臥^ねたまま
ヘレン姉さん 100
死にたいと 苦し^{かな}そうに祈ってるそうだよ」
「祈れば 願いは叶^{かな}うでしょうよ
弟よ」
(ああ 聖母 母なるマリア
祈れば願いは！ 天国と地獄の間^{あわい}で) 105

「でも今日も 泣きやめないで
ヘレン姉さん
姉さんの呪^{のろ}いを解いてくれって」
「わたしの祈りは届いた！ 彼はまだ祈るのよ
弟よ」 110
(ああ 聖母 母なるマリア
神にとどかぬ祈りがある^{あわい}か？ 天国と地獄の間で)

「でも 姉さんが呪いを解くまでは
ヘレン姉さん
魂は 死ぬに死ねないそうだよ」 115
「だったらわたしに 生きている人を殺せと言うの
弟よ」
(ああ 聖母 母なるマリア
生きている魂！ 天国と地獄の間^{あわい}で)

「でも彼は 姉さんの名を呼びつづけて 120
ヘレン姉さん
炎に肉^{からだ}体が溶けてゆく と言ってるそうだよ」
「わたしの心も 彼の歡^{こころ}心を求めて溶けていったわ
弟よ」
(ああ 聖母 母なるマリア 125

燃える心！ 天国と地獄の間あわいで)

「今度は ウエストホルム 西中洲のキースさんが駆けて来る

ヘレン姉さん

だってあの 風になびく白い羽飾りを知っているもの」

「その時が いよいよ嬉しい時がもうすぐ

130

弟よ」

(ああ 聖母 母なるマリア

それは嬉しい時なのか？ 天国と地獄の間あわいで)

「止まって何か言おうと 馬を静めているよ

ヘレン姉さん

135

でもその言葉は 風に飲まれて聞えない」

「いいえ耳を澄まして なんとでも聞いてちょうだい

弟よ」

(ああ 聖母 母なるマリア

何と言ったのか？ 天国と地獄の間あわいで)

140

「死ぬまえにひと目逢あいたいと

ヘレン姉さん

ユアーンのキースが 泣いてお願いしてるそうだよ」

「彼の魂に写るすべてのものの中で私に逢えるわ

弟よ」

145

(ああ 聖母 母なるマリア

魂に写るひとつの姿 天国と地獄の間あわいで)

「指輪と 割った硬質を送り返して

ヘレン姉さん

思い出のポイン川の土手を忘れないでって」

150

「ほかにこわ毀したどんなものを 添えて寄越すというの

弟よ」

(ああ 聖母 母なるマリア

ほかには何も！ 天国と地獄の間あわいで)

「姉さんにみんな返して 心からお願いしてるよ

155

ヘレン姉さん

姉さんが 死の苦しみからゆる赦してやるのを」

「ほかに奪ったどんなものを 返してくれるというの
弟よ」
(ああ 聖母 母なるマリア 160

ほかには何も 何もない！ 天国と地獄の間あわいで)

「姉さんの名を 苦しみ悶もだえて呼んでるそうだよ
ヘレン姉さん
その様子を見れば たとえ愛は冷めても涙を流すに違いないって」
「愛から生まれた憎しみは 愛とおなじめしい盲めなの
弟よ」
(ああ 聖母 母なるマリア 165

憎しみに変わった愛！ 天国と地獄の間あわいで)

「今度急いで駆けて来るのは キースの親爺おやしさんだよ
ヘレン姉さん 170
だってあの 風になびく白い頭髪かみを知っているもの」
「いよいよもうすぐ もうすぐ終わりよ
弟よ」

(ああ 聖母 母なるマリア
もうすぐ終わり！ 天国と地獄の間あわいで) 175

「僕を見て 何か言おうとしているよ
ヘレン姉さん
でも ああ 声は悲しく弱々しい」
「あのお強い男爵様が ここに何のご用事なの
弟よ」
(ああ 聖母 母なるマリア 180

これが最後か？ 天国と地獄の間あわいで)

「息子がおも泣きながら もし赦してくれるなら
ヘレン姉さん
肉体からだは死んでも魂は生きる と言ってるそうだよ」
「わたしが赦せば わたしの火も赦されましょう
弟よ」
(ああ 聖母 母なるマリア 185

そして彼女は赦すのだ！ 天国と地獄の間あわいで)

「親爺さんは 胸も張り裂けんばかりに
ヘレン姉さん

せめて かわいい息子の魂を救ってくれ とお願いしてるよ」
「火も魂は殺せない 魂は生き続けるでしょう

弟よ」

(ああ 聖母 母なるマリア

ああ ああ！ 天国と地獄の間あわいで)

195

「泣いて 道にひざまずき

ヘレン姉さん

後生だから一緒に行ってくれ と言ってるよ」

「息子の屋敷まで 道程は遠い

弟よ」

(ああ 聖母 母なるマリア

道程は遠い！ 天国と地獄の間あわいで)

200

「黒い馬に乗ったご夫人がやって来たよ

ヘレン姉さん

おまけに 真っ黒な服を着てて 姿も見えない」

「よく見ておくの 二度と見ることはないのだから

弟よ」

(ああ 聖母 母なるマリア

このうえ何を見よと？ 天国と地獄の間あわいで)

205

210

「頭巾が取れて お月様が

ヘレン姉さん

ユアーンの奥さんの金髪を綺麗に照らしているよ」

「私の勝利と彼女の絶望を祝福する瞬間ときが来たのよ

弟よ」

(ああ 聖母 母なるマリア

祝福と呪いの瞬間とき！ 天国と地獄の間あわいで)

215

「三日前には花嫁衣装の花冠かかんの下で輝いていた頬が

ヘレン姉さん

今は真っ青だよ」

「得意満面の朝と 続く三日の悲しみ

弟よ」

220

(ああ 聖母 母なるマリア
三日三晩！ 天国と地獄の間あわいで)

「うなだれた頭こうべの下から握りしめた両手を差し出し
ヘレン姉さん
すすり泣く声が 物悲し気な風の音と一つになって運ばれてくる」
「花嫁さんの新床でいったいどんな初夜の苦痛があったのかしら？
弟よ」
(ああ 聖母 母なるマリア 225
死の苦痛以外のどんな苦痛があろうか！ 天国と地獄の間あわいで)

「口がきけない 気を失いそうだ
ヘレン姉さん
唇を持ち上げて 月に向かって喘あえいでいるよう」
「その女の魂の喜びの歌など聴きたいものよ
弟よ」
(ああ 聖母 母なるマリア 235
女の悲しみの声無き叫び！ 天国と地獄の間あわいで)

「奥さんは 西中洲ウエストホルムのキースさんの鞍頭くらがしらに乗せられて
ヘレン姉さん 240
垂れた頭髪かみが 月に照らされて白く輝いている」
「真冬の雪よりも もっと白くなるがいい
弟よ」
(ああ 聖母 母なるマリア
悲しみに萎しおれた金髪あわい！ 天国と地獄の間あわいで) 245

「ヘレン姉さん 鐘が聞こえたでしょう
ヘレン姉さん
入相いりあいの鐘より もっと大きく鳴りました」
「入相の鐘ではなくて 弔いの鐘の音よ
弟よ」
(ああ 聖母 母なるマリア 250
彼の弔いの鐘！ 天国と地獄の間あわいで)

「かわいそうに でもあの重い鐘の音は怖いよ
ヘレン姉さん

空で それとも地の底で鳴ってるのかしら」 255
「ねえ みんな馬を回して戻っていったの？

弟よ」

(ああ 聖母 母なるマリア

このうえ彼女が望むものは？ 天国と地獄の間あわいで)

「ひざまずいた老人をた立たせて 260

ヘレン姉さん

みんな黙って急いでゆ去くよ」

「裸になった魂は もっと速く飛んでゆく

弟よ」

(ああ 聖母 母なるマリア

265

裸になった魂！ 天国と地獄の間あわいで)

「三頭は一緒に並んでい去ったよ

ヘレン姉さん

でも 奥さんの黒い馬だけ 遅れてる」

「花婿の魂も 独りで飛んで行ったの 270

弟よ」

(ああ 聖母 母なるマリア

孤独なる靈魂！ 天国と地獄の間あわいで)

「ああ 風は身を切る寒さのなかで悲しそう

ヘレン姉さん

275

そして彼らも 丘の麓ふもとで疲れて悲しそう」

「でも 彼とわたしはもっと悲しい

弟よ」

(ああ 聖母 母なるマリア

この世でもっとも悲しい恋人たち！ 天国と地獄の間あわいで) 280

「ごらんよ ごらん 蠟がすっかり溶けてしまった

ヘレン姉さん

そして炎が パッと燃えあがってゆく」

「でも炎はここで 最後のひととき一瞬燃えるだけなの

弟よ」

285

(ああ 聖母 母なるマリア

ここで最後のひととき一瞬！ 天国と地獄の間あわいで)

「ああ 戸口を過^{よぎ}ったあの白いものは何？

ヘレン姉さん

ああ 霜のなかでため息つくのは何ですか」

290

「わたしとおなじ いま亡くなった人の魂

弟よ」

(ああ 聖母 母なるマリア

亡くなった 亡くなった すべてが無くなった！ 天国と地獄^{あわい}の間で)

(山中光義訳)